

カナンの良き地によって予表されている
わたしたちの安息日の安息としてのキリスト

聖書：ヘブル 3:7—4:13

I. ヘブル人への手紙の中にある安息日の安息の正しい理解を持つには、聖書の中で最初に述べられている安息日の安息の意義を知る必要があります——創 2:2-3：

- A. 神は第七日に安息しました。なぜなら、彼は彼の働きを終え、満足したからです。神の栄光が現されたのは、人が神のかたちを持ち、神の統治を伴う神の権威が行使されて、神の敵を征服しようとしていたからです——創 1:26。
- B. 地上で人が神を表現し神を代行するという状況があるとき、その状況は神にとって安息日の安息です。安息日の安息とは、神の心の願いにおいて神が満足を得ることです——26-28 節、ヘブル 2:6-8 前半。
- C. 神の第七日は、人の第一日でした。人は創造された後、神の働きに加わったのではなく、神の安息へ入りました。人が創造されたのは、働くためではなく、神をもって満足し、神と共に安息するためでした——参照、マタイ 11:28-30。
- D. 安息日が表徴しているのは、神がすべてを行ない、すべてを完成し、すべてを備えたということと、人が自分のすべての働きを止めなければならないということです。安息日を守ることは、わたしたちの働きを止めて、神と神がわたしたちのために達成したすべてを、わたしたちの享受、安息、満足とするということです。これが神のエコノミーです——出 20:8。
- E. 新エルサレムは、神の究極的で永遠の安息日の安息です。なぜなら、すべての贖われた聖徒は、栄光の中の神をそこで完全に表現し、神の権威をもって永遠にわたって王として支配するからです——啓 21:10-11、22:1、4 前半、5 後半。

II. 安息日の安息は、わたしたちの安息としてのキリストであり、カナンの良き地によって予表されています(申 12:9、ヘブル 3:7—4:13)。キリストは三つの段階で、聖徒たちの安息です：

- A. 召会時代では、天のキリスト、すなわち、神を表現し、代表し、神を満足させた方、またご自身の働きから安息して、天で神の右に座している方は、わたしたちの霊の中でわたしたちの安息です(マタイ 11:28-29)。ヘブル第 4 章 9 節にある安息日の安息は、わたしたちの安息としてのキリストであり、カナンの良き地によって予表されています(申 12:9、ヘブル 4:8)。

B. 千年王国では、サタンが地上から除き去られた後(啓 20:1-3)、キリストと勝利を得た聖徒たちによって、神は表現され、代行され、満足します。そして、王国を伴うキリストは、勝利を得た聖徒たちのさらに満ち満ちた安息となります。彼らはキリストと共に共同の王となって(4, 6 節)、彼の安息にあずかり、享受します。

C. 新しい天と新しい地では、すべての敵が、最後の敵である死を含めて、キリストに服従させられた後(I コリント 15:24-27)、キリストは、すべてを征服する方として、神の贖われたすべての民の最も満ち満ちた安息となり、永遠に至ります。

D. ヘブル第 4 章 8 節から 9 節で述べられている安息日の安息は、最初の二つの段階、特に第二段階における、わたしたちの安息としてのキリストを指しています。その安息は、わたしたちが努め励んで追い求めて入るようにと、わたしたちのために残されています：

1. 最初の二つの段階の安息は、努め励んで主を追い求める者たちへの賞です。彼らは、彼を満ち満ちた方法で享受し、勝利者となります。第三段階の安息は、賞ではなく、贖われたすべての者に割り当てられた満ち満ちた分け前です。

2. キリストがわたしたちの安息であることの第二段階で、彼は全地を彼の嗣業^{しぎょう}として所有し、それを千年間、彼の王国とします——詩 2:8、ヘブル 2:5-6。

3. キリストがわたしたちの安息であることの第二段階で、勝利を得るすべての信者たち、すなわち第一段階において彼を安息として追い求め、享受する者たちは、千年期において彼が王として支配することにあずかります(啓 20:4, 6、II テモテ 2:12)。彼らは地を受け継ぎ(マタイ 5:5、詩 37:11、ルカ 19:17, 19)、彼らの主の喜びにあずかります(マタイ 25:21, 23)。

III. わたしたちは、マタイ第 11 章 28 節から 30 節における主の言葉に注意を払う必要があります——「すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに來なさい。そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える。わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。そうすれば、あなたがたは魂に安息を見いだす。なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」：

A. 労苦は、律法の戒めや宗教的規定を守ろうと努力する労苦だけではなく、何か働きに成功しようとして奮闘する労苦を指しています。このように労

苦する人はだれでも、常に重荷を負っています。

- B. 安息は、律法や宗教の下にある、あるいは働きや責任の下にある労苦と重荷から解放されることを指しているだけでなく、完全な平安と満ち満ちた満足を指しています。
 - C. 主のくびきを負うとは、御父のみところを取ることです。それは、律法や宗教のどんな義務によって規制されたり制御されたりすることや、何かの働きによって奴隷にされることではありません。それは、御父のみところによって拘束されることです。
 - D. 主はそのような生活をして、御父のみところ以外の何も顧慮しませんでした(ヨハネ 4:34, 5:30, 6:38, イザヤ 42:4 前半, 参照、53:2, 11:1-4 前半)。彼はご自身を、完全に御父のみところに服従させました(マタイ 26:39, 42)。ですから、主はご自身から学ぶようにとわたしたちに求めます(エペソ 4:20-21)。
 - E. 柔和、あるいは温和であるとは、反対に抵抗しないことを意味し、へりくだるとは、自分を高く考えないことを意味します。彼はご自身を完全に御父のみところに服従させ、ご自分のために何もしようとはせず、ご自分のために何かを獲得しようと期待しませんでした。ですから、状況がどうであっても、彼は心の中に安息を持っていました。彼は御父のみところで完全に満足していました。
 - F. 主のくびきを負い、彼から学ぶことによってわたしたちが見いだす安息は、わたしたちの魂のためです。それは内側の安息であって、性質において単なる外面的なものではありません。
 - G. 主のくびきは御父のみところであり、主の荷は御父のみところを遂行する働きです。そのようなくびきは負いやすく、苦しくはありません。またそのような荷は軽く、重くはありません——参照、マラキ 3:14。
 - H. 主のくびきが負いやすいことが意味するのは、主のくびき、すなわち、御父のみところが良く、親切で、柔和で、温和で、楽しいということであり、過酷で、激烈で、陰しく、苦痛であることの反対であるということです。
- IV. 出エジプト記第 31 章 12 節から 17 節が啓示しているのは、安息日が幕屋の建造の命令の後にあるということです：
- A. 『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。それは、あなたがたの代々にわたる、わたしとあなたがたとの間のしるしであって、わたしがあなたがたを聖別するエホバであることを、あなたがたが知るためである。……それゆえ、イスラエルの子たちは安息日を守り、永遠の契

約として、代々にわたって安息日を守らなければならない。それは、永遠にわたしとイスラエルの子たちとの間のしるしである。それは、六日の間にエホバが天と地を造り、七日目に安息し憩われたからである』——13, 16-17 節。

- B. 七日目に、神は「安息し憩われ」ました。人は神の憩うものでした。なぜなら、人は神ご自身のかたちに創造され、霊のある者とされたからです。それは、人が神と交わることができ、神の仲間また配偶者となることができるためでした。
- C. わたしたちは、以下の神聖な原則を見る必要があります。すなわち、神はまずわたしたちに享受をもって供給し、それからわたしたちは神と共に働くということです。わたしたちは、神の働きの中で神と一であるために、彼を享受しなければなりません。
- D. ペンテコステの日に、弟子たちは主の享受で満たされていました——「彼らは新しいぶどう酒で満たされている」(使徒 2:13)。それからペテロと十一人は立って、主と共に働きました(14 節)。
- E. 神にとって、それは働いて安息する事柄です。人にとって、それは安息して働く事柄です。それから、わたしたちは主と一になることによって主と共に働きます。
- F. わたしたちは神の民として、一つのしるしを帯びているべきです。そのしるしとは、わたしたちは神にわたしたちの力、活力、すべてとさせていただく必要があり、それによって、わたしたちは彼と共に働いて、キリストのからだとしての召会を建造することができるというものです。これは彼を尊び、彼に栄光を帰します——I コリント 15:10, 58。
- G. わたしたちが帯びるしるしとは、わたしたちがまず神と共に安息し、神を享受し、神のゆえに憩い、神で満たされ、それからわたしたちを満たす方と一になって、彼と共に働くというものです。これは神との永遠の契約、永遠の合意です。
- V. 良き地としてのキリストを享受する手段は、生きていて効力がある神の言葉です。すなわち、「どんなもろ刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄を切り離すまでに刺し通して、心の思考と意図を識別することができ」ます——ヘブル 4:12 :
 - A. イスラエルの子たちは、神の満ち満ちた救いにあずかっているわたしたち新約の信者たちの予表です(I コリント 10:6 前半, 11) :
 - 1. 第一段階で、わたしたちはキリストを受け入れ、贖われ、この世から救

い出されます。それは、イスラエルの子たちがエジプトから救い出されたようにです。

2. 第二段階で、わたしたちは主に従うことで、さまよう者となります。それは、イスラエルの子たちが荒野をさまよったようにです。わたしたちがさまようことは、常にわたしたちの魂の中で起こります。
 3. 第三段階で、わたしたちは満ち満ちた方法でキリストにあずかり、彼を享受します。それは、イスラエルの子たちが良き地の豊富にあずかり、それを享受したようにです。これはわたしたちが霊の中で経験するものです。
 4. ヘブル人信者たちは、彼らのヘブルの宗教をどのようにしようかと、彼らの思いの中で迷っていました。このような思いの中で迷うことは、魂の中でさまようことであって、霊の中でキリストを経験することではありませんでした。
- B. ヘブル人への手紙の筆者はヘブル人信者たちに、魂の中でさまよってためらうことをしないで、霊の中へと前進して、天のキリストにあずかり、彼を享受するようにと勧めました：
1. 天の御座に座しているキリストは(ローマ 8:34)、今やわたしたちの中にも(10 節)、すなわちわたしたちの霊の中にもいます(Ⅱテモテ 4:22)。この霊は、神の住まいがある所です(エペソ 2:22)。
 2. ベテル、神の家、神の住まい、すなわち、天の門において、キリストははしごであり、地を天に結び付け、天を地にもたらしめます(創 28:12-17、ヨハネ 1:51)。わたしたちの霊は今日、神の住まいである場所ですから、この霊は今や天の門であり、そこにおいてキリストははしごであって、わたしたち地上の人を天に結び付け、天をわたしたちにもたらしめます。
 3. ですから、わたしたちが霊に戻る時はいつでも、天のはしごとしてのキリストを通して、天の門に入り、天にある恵みの御座に触れます——ヘブル 4:16。
 4. ためらっていたヘブル人信者たちは、彼らの魂の中でさまよっていて、彼らの霊を無視しましたが、新しい遺言は完全にわたしたちの霊の中の事柄であって、魂の中の事柄ではありません——ローマ 8:16、Ⅱテモテ 4:22、ガラテヤ 6:18。
- C. ヘブル人信者たちの魂、およびその迷っている思い、神の救いの道に対する疑い、自分の利益を考慮することは、生きていて、活動しており、刺し通す神の言葉によって碎かれなければなりません。そうすれば、彼らの霊

は魂から分けられます——ヘブル 4:12：

1. 骨髄が関節の中に深く隠されているように、霊は魂の中に深く隠されています。骨髄と関節を分けるためには、おもに関節が碎かれる必要があるように、霊と魂を分けるためには、魂が碎かれる必要があります。—— I ペテロ 3:4。
2. わたしたちが聖書を読む時はいつも、聖書は生きていて、活力を与える、鋭いものでなければならず、わたしたちの魂と霊を分けることができ、思考と意図を識別し、何が自己からのものであり、自己のためであるか、何が神からのものであり、神のためであるかを、明らかにするものでなければなりません。わたしたちは霊の中でのすべての祈りによって、言葉と信仰とを混ぜ合わせ、この言葉を生きていて、効力のあるものとしなければなりません——ヘブル 4:2. エペソ 6:17-18。
3. 神の生きている言葉はわたしたちの存在の中を刺し通して、わたしたちの迷っている思いとさまよっている魂からわたしたちを救い出して、わたしたちの霊の中での安息日の安息であるキリストの中へともたらさなければなりません。わたしたちは、さまよっているわたしたちの魂の中でためらうべきではなく、魂を否み、霊の中へと前進し、天のキリストにあずかり、享受する必要があります。それは、わたしたちが千年期において、彼が王として支配するとき、王国の安息にあずかることができるためです。